論文要旨

1. 黄 迪(こう てき・中国)
「猫へのまなざし —歌川国芳の猫図を素材に—」

キーワード:猫、日本人の猫イメージ、浮世絵における猫図、歌川国芳、『朧月猫草紙』

要旨:

猫は古来「様々な姿」で日本社会に存在し、現在はいっそうの猫ブームであるといっても過言ではないと考えられる。本論の課題は、日本人の猫へのまなざしの変遷によって、現在の「猫イメージ」を形成するまでの過程を分析し、さらに日本人の動物観をも探ってみることにある。

本小論文では、現代における「猫イメージ」の形成期であったと思われる江戸時代後期を研究対象期とする。その時代に大活躍した浮世絵師である歌川国芳の猫図を素材に、絵画表現から日本人の猫に対するイメージを分析する。そして、山東京山が執筆し、歌川国芳が挿絵を描いた文学作品である『朧月猫草紙』を読み込み、美術と文学の両面から日本人の猫に対するイメージを分析する。また、随筆作品を素材に、江戸時代後期の猫をその時代の中でとらえてみた。

その結果、以下のことが分かった。猫は、人々の愛玩動物であり、庶民にとっては鼠除けにも役立つ動物であった。一方、年を経て通力を得た猫は、化け猫となって人に仇をなすと考えられる。また、擬人化された猫に与えられた不気味さについて分析してみた。いわば、善と悪という二面性が日本人の持つ猫のイメージであることが分かった。

2. ヴェドラン・ムフティチ(スウェーデン)
「岐阜弁の言語学的分析と語彙・表現の使用に関する調査」

キーワード:岐阜弁、文法と文型、アクセントと発音、特徴、若者と高齢者の岐阜弁

要旨:

岐阜は地理的に日本の中央、関西と関東の間に位置している。よって岐阜の方言は、関西弁と関東弁が融合した方言だと推測される。本稿では、岐阜弁の言語学的分析を行なう。まず、岐阜弁の文法と文型ではどのような助詞が使用され、動詞はどのように活用されるかなどを見る。次に、アクセントと発音の分析では、県内の言葉の発音とイントネーションを調べる。そして、岐阜弁の語彙については県内でどのような言葉が使用されるか調べる必要がある。この三章(文法と文型、アクセントと発音、語彙)で岐阜弁にどのような特徴があるかを報告する。

さらに、「岐阜弁は消えつつある」という問題意識を元に岐阜弁の語彙について調査を行なう。調査は20の岐阜弁の言葉について行なった。その調査票を岐阜県生まれ、あるいは岐阜県に長期定住する大学生の若者と高齢者に配り、岐阜弁の言葉をどの程度知っているか、使えるかを計り、結果を報告する。

3.　林　楷発（りん　かいはつ・中国）

「日本社会におけるひきこもり」

キーワード：若者のひきこもり、障害、環境、脱出

要旨：

日本では、「ひきこもり」という社会問題が注目を集めている、「ひきこもり」とは仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6か月以上続けて自宅にひきこもっている状態を指すのである。厚生労働省のデータによると、ひきこもりのいる世帯数は、約32万世帯とされている。この不可解な現象は、どのような社会背景が生み出したものなのだろうか。そして、どのような変遷を経て、今日の状況に至ったのだろうか。

本稿では、まず、ひきこもりの若者たちが、どのような生活を送っているのか、その現状を述べた。次に「ひきこもり」の代表的な 4 つのタイプ（不安型、強迫型、人間不信型、リアリティ逆転型）を紹介し、それぞれの症状と原因を考察した。

上記を踏まえた上で、ひきこもりから脱出させるためのいくつかの対策を提示した。ひきこもりも障害の一つで、それを作りだしたのはほかでもなく、私たちである。周りの環境を変えることによって、症状が、改善したり、悪化したりする。そのためには、周りにいる人々の正しい対応が必要である。

4.　金　亨晙（きむ　ひょんじゅん・韓国）

「「霊魂のゆくえ」意識の韓日比較―現代日本社会における墓苑問題の分析から―」

キーワード：韓日比較、霊魂観、墓地、思想の変化

要旨：

韓国では、伝統的に墓地が山に造られるのに対して、現代日本の社会では、住宅隣接地に造られることがある。両国民は死者の魂についてどのように考えているのか。日本で社会問題化している住宅地における墓苑設置の分析から、課題を追究してみる。

本稿では、墓苑問題の分析を通じて、韓日「霊魂のゆくえ」の認識を研究するのが目的である。文献、パブリックコメント、チラシ等による調査を主な方法とした。

今の日本はほとんどが火葬になっているが、昔は土葬も多く行われ、墓地が韓国のように山の方に置かれた。これは、穢れという思想があったからである。穢れの思想というのは、抽象的に汚いと感じることで、ここでは、死者忌みを指す。しかし、現代日本の社会では都市内墓地不足という問題が生じ、住宅隣接地に墓地が作られている。これは、今の日本人は死者に対する穢れ思想が薄れているとも言える。

一方、韓国には、土葬された死者の魂は山の神聖な場所に集まって、墓地を媒体として、あの世に行くという霊魂観がある。しかし、昨今主流は土葬から火葬に変わりつつあり、霊魂観の変化が見られる。このように両国の間では、霊魂観について違いがありながらも、思想が変化しているという共通点がある。

5.　金　ソミ（きむ　そみ・韓国）

「「夜叉ヶ池」伝説と現代　―韓国人の目から見た竜神信仰―」

キーワード：妖怪伝説、夜叉ヶ池、雨乞いと人身御供、泉鏡花『夜叉ヶ池』、竜神の意義

要旨：

日本では妖怪をテーマとした産業が非常に盛んであるため、私は日本の妖怪に興味がわいた。そこで、岐阜県の妖怪伝説である「夜叉ヶ池」伝説を素材に、妖怪伝説に現れている日本人の心性について考察したいと思った。

本稿では、まず韓国人である私から見た「夜叉ヶ池」伝説と、その中の重要なキーワードである「竜神」について、文献を中心に考察する。そして、伝説と同名の戯曲作品である、泉鏡花の『夜叉ヶ池』とその芝居に関連した文献と映像を分析する。最後に、「NPO 法人夜叉ヶ池の会」の様々な活動について調べるために行った現地調査の情報に基づいて、「夜叉ヶ池」伝説が持つ現代的意味を考察する。

これらの考察を通して、時間の流れの中で、日本人が妖怪伝説を通じて伝えようとするものも変化してきたということと、その理由を明らかにしたいと考えている。

6.　タチアナ・コレディナ（ロシア）

「京都弁　―京都弁を例として関西弁の動向を見る―」

キーワード：京ことばと京都弁、方言の変化、関西共通語化、ステレオタイプ、京ことばを守る活動

要旨：

日本に様々な方言が存在する。一番有名なのは関西弁だと言える。関西弁の中で雰囲気が違う、上品な京都の方言のイメージに興味を持ち、本稿では京都の方言に研究の焦点を当てた。京都の方言と逆のイメージを持つのは大阪弁である。だが、実際そんなに違うのだろうか、それともそれはただのステレオタイプかと疑問に感じ、まず、その違いについて調べてみることにした。

関西出身ではない大学生が持つ京都と大阪の方言に対するイメージの調査、現在の京都の若者の方言の使用と意識に関する調査、この二つアンケート調査を実施した。その結果、京都の方言は非常に変化しており、そのステレオタイプ的なイメージにあまり関係がないことは明らかになった。また、関西共通語を使う傾向が強くなり、大阪と均質化しつつあることが分かった。

それから、伝統的な方言を保存する方法があるか、また保存する意味は何かという疑問に答えるために、方言保存活動している京ことばの会の代表者にインタビューを行った。その結果、守って残したい気持ちを持つ人たちがいるが、昔の方言はもう死語に近い状態になった事実の上で、できるのはただ文化の一部として保存することが分かった。現在、関西若者の方言は統一される傾向があるが、若者の方言に対する肯定的な意識が高く、近い将来に方言は完全に消滅するとは考えにくいことだと言える。

7. 黄 曦霆(こう ぎてい･中国)

「太平洋戦争における特攻隊 ―実態と隊員が残したもの―」

キーワード:特攻、陸海空の展開、伝統精神、遺書、悲劇

要旨:

本稿は、太平洋戦争時、日本軍が創案した前代未聞の大規模特攻作戦という歴史的事実を中心に、特攻隊をめぐる外的条件と潜在的要因、および現代の我々が特攻から学ぶべき事柄を考察することを目的とする。

当時凄まじい戦況の中、特攻は戦局挽回のために、単に「神風」のような空中作戦だけでなく、陸海空において特別な使命の元で展開された作戦である。隊員は学徒兵が多く、しかも死ぬことが前提の作戦であった。

特攻が日本に誕生したのは、決して偶然ではない。当時の戦争と日本の有様を探ってみると、以下のことが判明する。それは、天皇を「現人神」に位置づける神道が国を支配する礎となり、命を惜しまぬという人命軽視の武士道の精神と統合され、物質より精神力を重視することになったということである。連合国軍とは比較にならないほど大きな戦力の差による戦局の崩壊という外的要因も加わり、指導者たちは特攻作戦を作り上げていったのである。

特攻による戦死者は「英霊」でもなく、「犬死」でもなく、犠牲者である。このような悲劇を二度とこの世に繰り返さないために、人権の最優先というヒューマニズムを各国の政策の核心に据えること、各個人が思想的に自立することが大切だと感じている。

8. ティム･パルムロース(スウェーデン)

「英語 主語 不可 ―日本人の英語の主語使用について―」

キーワード:日本語、英語、主語、人称代名詞、省略

要旨:

本稿は、日本語と英語の主語の特徴や相違点と類似点の比較点などを分析し、それに基づいて研究を行った。英語話者が日本語の主語省略ができないという先行研究は多数あるが、一方、日本語話者が英語の主語の特徴が理解できるかという研究は、管見の限りではない。この論文は、その点を補うことを目的とした。

研究方法として調査を選んだ。調査は二つの問題から成る。日本の英語教育の特徴と呼ばれる穴埋め問題(主語)と、和文英訳問題である。これらを日本人大学生にしてもらった。調査結果は、様々な興味深い点を示した。回答は、予想よりよい成績だったが、一方で、日本人大学生の弱点らしい点も明らかになった。そこで、その調査結果が出た理由について考察した。本調査における誤答の理由は二つあると考えられる。一つは、英語の主語についての日本の英語教育の不足である。もう一つは、日本人大学生の多くは英語を書く時も日本語で考え、それを直訳することである。穴埋めは思った通り和文英訳よりうまくできるが、和文英訳では、日本語では自然だが英語では不自然な回答が、決まったところで見られた。

更に、本課題とは離れるが、和文英訳の英語の文法や統語法、つづりなどの間違いが多数あったことも指摘した。